

FCT発足のころと鈴木みどりさんの大活躍

竹内, 希衣子

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

3

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2021-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025512>

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻1号、004-009

特集 「鈴木みどりとメディア・リテラシー研究：今日的意義、そしてこれから」
——思い出——

FCT発足のころと鈴木みどりさんの大活躍

竹内希衣子

FCT元スタッフ

FCTの創設メンバーでいらしたG・オルソンさんは「FCTを創ろうというアイディアは1976年新宿駅ビルの小さなコーヒーショップでの5人の小さなミーティングから生まれました」と書かれています。1977年の創設シンポジウムは「子どものテレビの二重の公共性」と題して開かれた、と記録されています。そして78年には鈴木さんやオルソンさんたち5人がアメリカで子どものテレビに関わる市民活動をしていたACTの10周年の集いに参加。その帰国報告を兼ねてのFCTの集まりについて、新聞に報じられたのを見て私ははじめてFCTの存在を知ることになりました。そしてメディアをめぐる様々な問題について、それぞれの職業や社会的立場を超え、今日のメディア社会を生きる子どもたち、女性たちの視点から問題を提起していこう、という会の目標に目を引き付けられました。

1. FCTへの参加

その頃、私は3人の小学生の子どもたちのお守り役をほとんどテレビに依存していました。娘が3歳だったころのこと「テレビばかり見ていると今に尻尾が生えてくるってテレビが言っているけどほんとかなあ……」。もぞもぞしながら私に聞きに来ました。そのケチャップのCMがちょっと気になるようでした。テレビCMで宣伝しているお菓子を手にしたときの喜びようは異常ともおもえるほどでした。土曜日には特別に「8時だよ！ 全員集合」が終わるまでは起きていていい、という許可を彼らはどんなに楽しみにしていたことか。日々、子どものテレビ視聴について思うこと多かったけれど、どうすることもできなくて過ごしていました。

かねて私の気になっているテーマ「子どもとテレビ」について考える場が創設されたという記事に飛びつくように新聞社に連絡して、教えてもらったのがFCT事務局・久田恵さんの連絡先でした。市谷で開かれた集会に何度か出かけ、掲げられる難しいテーマに現実との乖離、戸惑いも感じていました。あるとき、逗子にお帰りになる鈴木みどりさんが、東横線で横浜で乗り換える、とのことで同じ線の私は一緒に帰ることになり、おしゃべりをしていたとき、突然「あなたスタッフになってくれますか」と言葉をかけられてびっくり。ともかく2、3日の時間のゆとりをもらって、参加することを決めました。

「スタッフはどうするとなれるのですか」「なりたいひとがなるのよ」「何をするのですか」「できることをするのよ」……すべてこの調子。

なりたいひとがスタッフになり、したいことをする……それがとんでもなく忙しい FCT 活動参加の始まり、1978 年のことでした。

その頃 FCT 事務局は鈴木さんの自宅、そしてスタッフの集まりは東京の久田恵さんのマンションで行われていました。謄写版刷りの作業や打ち合わせをする部屋の隅には、生後 1 年にもならない長男の連ちゃんがおとなしく寝かされていました。後に久田さんと同じくノンフィクションライターとして活躍するようになる稲泉連さんとの最初の出会い。彼は 26 歳で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞、母子 2 代の受賞者として今活躍中です。

その年 10 月には発足 2 年目での FCT 活動の基本的姿勢を検討するフォーラムが開かれ、市民グループとして自主的な研究プロジェクトの発足などが検討されると同時に、会員組織としての会費振り込み口座の開設など、事務的な話し合いも行われ、FCT 活動の基本的な方針が決まり、私は毎月開かれる集会フォーラムを担当することになりました。

毎月第 2 土曜日 2 時から、市谷の YWCA、後にルーテル教会の集会所などで午後の 2 時から開かれるフォーラムは、鈴木みどりさんが講師の依頼を担当。成城学園の教師や大学の教員など幅広い方たちが、講師料、交通費、一切何もなし、で講師を引き受けてくださったのは、まさに鈴木さんお持ちの迫力の故だったでしょう。

毎回 50 人くらいの参加者があり、会員ばかりでなく大学教員、新聞・テレビの取材関係、学生、主婦、消費者関係など、それは多彩な顔ぶれが講師を囲み、終わった後は話し合いで盛り上がりました。

新聞には毎回のようにフォーラムの取材報告が掲載され、それをきっかけに参加者が増えていきました。「フォーラムってなにをやる場所ですか?」。講演会、集会、にはなれた人たちにとっても、フォーラム、は聞きなれない言葉だったでしょう。

「どういうことするのですか?」という電話を受けて説明するのもひと仕事で、「肩書ははずしてみんなで語り合う会です」と答えても、どこか不得要領な感じを受けるようでした。

毎月の私の仕事はガリ版の A4 一枚にフォーラムのお知らせを書いて謄写版で刷り、それを 300 通、別々の封筒に入れて 70 円の切手を貼って送る。それは大仕事で毎回のように子どもたちが総動員で手伝ってくれました。今でも「FCT の手伝いをした」と彼らの語り草です。

フォーラムはこの後隔月になって、私の仕事も少しくなりました。後にお知らせは「プリントゴッコ」を使っの葉書になりましたが、パソコンなどない時代の集会案内はなかなか手間暇かかる仕事ではありました。

2. 半身の連帯、への理解は

81 年 4 月に行った会の 3 周年記念シンポジウム「子ども向け CM を考える」には 70 名近い人が参加。75 年にハウス食品の「私作る人、ぼく食べる人」という CM が問題になって「行動

を起こす女性たちの会」の抗議などで中止になったこともあり、ようやく子どもをターゲットにしたCMへの視点が厳しくなりつつあり、鈴木さんへの取材が相次ぎ、そのコメントが多く紹介されるようになりました。それにつれて、会員になりたいが、という問い合わせも多くなるようになりました。

「どうすると会員になれるか」「会員は何をするのですか」

色々質問されてもよくわかりません。会費を4000円納めてくださると会員になります（B会員という賛助的な立場の10000円会員、もあり、後に4000円は5000円になりました）。でも会則も総会も理事会もない、企業人間の方たちにとっては居心地の悪い会員組織だったらしい、このあたり、まさに鈴木さん独壇場の組織でした。

「半身の連帯」という意識は、日本の組織にはなかなか理解を得にくい発想だったはずです。なんでも全力投球、シャカリキ、が賞賛される社会にあって、こんなにぐにゃぐにゃの組織でそれでもなんだかスタッフみたいなひとが集まって、できてしまうことがある、

鈴木さんがどこからそういう発想を得たのかわかりませんが、みんな半信半疑で、でも

けっこう自主的に働いていました。半身の連帯の牽引車が”全身で“関わる人、鈴木みどりさんあつての成り立ちであったことは言うまでもありません。

79年1月からは会員係だった久田恵さんの手になる「会員通信」1号、これもガリ版手刷りA4タイプの4頁という初々しいもので、運営委員の紹介、オープンフォーラムの予定などが書き込まれ発送されています。私は81年9月から会員係も兼務になり「会員通信」の発行も引き受けて、それは忙しい日々になりました。鈴木さんから電話がかかってくると家中しんと静まり返り、今度はなにを引き受けるのかと、少し心配で気にしている感じが伝わってくる日々でした。「威令行われる」というのではなく、「アハハやりましょうよ!」と言われるとなんとなくその気になって引き受けてしまう、フシギな人なのです。

1981年4月には「GAZETTE」1号の発行。これも鈴木さんの発想です。視聴者から視聴者へ、そして研究者へ、放送。広告関係者へ、送られる手作りの情報である、とうたってあります。GAZETTEについては別の稿で詳しく伝えられるでしょう。

フォーラムの開催、「会員通信」と「GAZETTE」の発行、そして「テレビ診断」という

気が遠くなるような細かいテレビ番組やCMの分析調査、報告書の発行、そして日本中あちこちで開かれる講座への講師派遣……なんとも忙しい日々でした。

みんなヴォランティア、手弁当で一日がかりの打ち合わせ、作業・・鈴木さんのエネルギーな活動に賛同すればするほど忙しくなる、そんな日々でした。

私がこの稿のための下書きに使っている原稿用紙は44字×17行という横長の緑色ケイのもので「FCT テレビ診断分析調査」という文字が刷り込まれています。テレビ診断の詳細な報告書を作るにあたって、鈴木さんが印刷所に掛け合って、特別に刷ってもらったフシギな原稿用紙。あと10枚残っていた私の手持ち最後の原稿用紙ですが、これも鈴木さんの”遺産“——微笑ましい印刷所との掛け合いを思い出します。

3. 『テレビと子ども』の発刊

FCT でまとめた最初の本『テレビと子ども』が出版されたのは1981年4月でした。会員として参加していた学陽書房勤務の編集者江波戸哲夫さんの尽力で、鈴木さんを中心に久田恵さんや私など何人かが手分けしてまとめ、多くのスタッフの様々な分担から成り立った本でした。1300円、と当時としては安くない値段でしたが、増刷を重ね、FCTの大きな財源になりました。そして後にこの本をきっかけに、江波戸さんの勧めで久田さんが書かれたノンフィクション『フィリッピーナを愛した男たち』が大宅壮一ノンフィクション賞を受賞することになり、東京会館で開かれた文藝春秋主催の授賞式にはFCTスタッフが大勢参加して、晴れがましい思いでお祝いました。その後江波戸さんもノンフィクションライターとして独立して前職の銀行や企業の取材でライターとして独立、多くの著書を出され、これもFCTのうれしい思い出として残りました。

92年には鈴木さんがカナダから持ち帰った『メディア・リテラシー』の翻訳は、やはりフォーラムに参加していらした田悟恒雄さんが社長の「リベルタ出版」から鈴木さんの訳で出版され、日本におけるメディア・リテラシーという言葉の広がりには大きな功績を残しました。

79年12月にはFCT2周年記念シンポジウム「子どものテレビの新しい行動原理」で「大きな流れに抗して」と題した奥平康弘さんの記念講演には80名余りの人々が参加。80年の3周年記念シンポジウムは「子ども向けのCMを考える」。

創立記念シンポジウムの他に毎月、その後は隔月に行われたフォーラムのテーマを少し紹介するだけでも、いかに画期的、創造的なものであったか、が理解されるのではないかと思います。上げておきたいと思います。

「テレビの現場は何を考えているのか」。このテーマでは当時話題の人だった龍村仁さん、女性から見たテレビの現場を語ってくれた木本教子さん、テレビ朝日の創設時の社員でFCTの会員にもなってくださった高瀬有宏さんの紹介で来てくださった「ニュースステーション」の現場の早河洋さんは慣れない場所でカチカチになりつつ現場の立場を話してくださった。早河さんは後に同社の社長、会長になられ、私には微笑ましい思い出が残りました。消費者問題のエキスパートでいらした加藤真代さん、民放労連から日本テレビを経てジャーナリスト会議の重鎮になられた隅井孝雄さん、など鈴木さんの交渉能力で実現したフォーラムの講師は多岐にわたるテーマで話題提供して下さいました。

日経新聞の松田浩さん、共同通信社の現役でいらした原寿雄さん、岩波書店の坂巻克巳さんなど、メディアの現場の方たちが時には講師として、時には一参加者として土曜の午後ふらりと参加してくださるのは、実に心強い思い出として残りました。

消費者新聞勤務でいらした今井真介さんのように、取材者として毎回参加されながら会場の設営から終わった後の始末迄毎回手伝ってくださる奇特な方もおいででした。

「メディアの送り手、受け手という上下関係ではなく、市民としての関係で考えることが大切です」と言ってくださった原寿雄さんとはその後も講演会などでお目にかかったりご自宅のバー

ベキューパーティに招いて下さったり、日本の大切なジャーナリストとして私が終生変わらず尊敬できる方との嬉しい出会いにもなりました。

原さんは95回フォーラムで「テレビの社会的責任を問う」という大きなテーマで、市民としての発言をどう可能にするか、オウム報道がもたらしたもののという熱のこもった問題提起をしてくださいました。

「兵庫県から朝早く起きて参加した甲斐がありました。子どもへのテレビの影響については諦めムードでしたが改善の手があることがわかり大変うれしく思いました」。こんな男性からの声が寄せられたり、ぜひできることで参加を考えたいという女性からの声もあったりして、スタッフはみなほっと一息、なんとかやっていけそう、とまた気を取り直すような場面もありました。こういう時にいちばん元気なのはいつも鈴木さんで、「今度はなにをはじめよう」とすぐ考えだすので、ちょっと戦々恐々、のひと時でもありました。

1978年度のNHKの「放送文化基金」を申請するために愛宕山の「放送文化研究所」を訪ねて「テレビCMの子どもに及ぼす研究」というテーマで申請が通り300万円の助成を得ることができたのは、とても心強い励みになりました。

92年11月にはFCT15周年記念国際フォーラムとして「テレビ視聴者の権利とメディア教育」を上智大学で開催。その折にはスタッフが八ヶ岳の鈴木さんの別荘で合宿して起草した「テレビに関する市民の権利憲章」の原案を報告し、テレビと市民との関係性について問題提起もしました。鈴木さんの活動の海外への広がり、カナダをはじめとして多くの外国籍の方たちとの交流にもつながり、フォーラムにはこういう方たちの参加、発言が大きな影響力になったのも事実です。

95年には「阪神大震災」が起きてメディアはこの報道一色になり、FCTは急遽各局の報道を録画して、何を伝え、何を伝えなかったか、報告をまとめました。特にスタッフが気になったのは報道映像の中で、「助けるのは自衛隊員、助けられるのは市民」という場面の多さでした。実際には市民が助け合って命が助かったり救い出されたりしたというエピソードが新聞には報じられていたのに、なぜ「助けるのは自衛隊ばかり？」という疑問でした。この傾向は今でも災害の現場報道で気になることがあります。ちょっとしたこだわりの眼をむけると気になりだす……そんな場面がニュース報道には今も現実としてあり、「仕方がないでしょう？」と思うか「??」とを感じるか、これは大切なメディア・リテラシーではないか、と思っています。テレビに反応する、そのことで子どもにも周りにいる人にも「え？」という気付きを及ぼす、そんなきっかけが大切なのではないのでしょうか。

スタッフが集まると手作業の合間に、まあよくしゃべる、議論する、一番声が大きいのが鈴木みどりさん。作業がおわるとどっと疲れる、けれど満足感も残る、そんな日々が続きました。

4. 市民のテレビの会へ

92年にはFCTの名称が「市民のテレビの会」になりました。Cがchildren'sからCitizenに

なり、「FCT 市民のテレビの会」になりました。

そのころから鈴木みどりさんは京都の立命館大学の学生と交流をもつようになり京都通いの回数も増えていったようです。そして94年4月には正式に立命館大学の教授として迎えられ京都にも住まいを作って、東京と往復の忙しい日々が始まりました。

「一夜明けたら主婦が大学教授になっていた」——ある朝の新聞報道記事にびっくり仰天したことを忘れることができません。まだそんな時代なのでした。

私はその年に還暦を迎え、母の介護のこともあり、とにかく忙しいFCTスタッフを卒業するきっかけと考えることにしました。FCTの活動が一つのヒントにもなってNHK OBの方たちが91年に立ち上げた「放送を語る会」にはお誘いを受けて集まりに参加したり、本部前の集会に参加するなど、いまでもお付き合いが続いていて、先ごろ創立30年の記念誌に寄稿を求められたところでした。

東大の大学院・情報環の教授水越伸さんが2001年に立ち上げた「メルプロジェクト」は市民メディアの表現とリテラシーのための実践的研究、として全国組織の会で、美ヶ原で行われた発会のための合宿には私も参加、ちょっとした先輩気分になったこともありました。後にこの会の集まりに参加するとFCTや放送を語る会でおなじみに方に出あうこともあり、メディアに関わる市民の意識の広がりへの関心の深さを感じました。

5. 鈴木さんの残されたもの

FCTは新開清子、佐々木はるひさんをはじめ古くからのスタッフが今も「FCTメディア・リテラシー研究所」としての活動を続けているのは本当に心強いことだと感服しています。

鈴木みどりさんが亡くなられて15年の月日がたって、あのエネルギッシュな言動が現実ではなくなってもなお、受け継がれているものがある。スタッフとして、会員として、学生として、様々なかかわり方で残されたものにも違いはあるでしょうが、それぞれに大切なものであるはずです。鈴木さん、と呼ぶ人たちと鈴木先生と呼ぶ人たちの世代差は歴然とあるのでしょう。

私にとっては、出版社をやめてフリーの立場で雑誌の仕事などしていた世界から、子どもをきっかけにひろがった鈴木さんとの出会いで、また違う広い世界のものの考え方、見方ができるようになりました。今まで出会ったことがないタイプで様々な活躍しておいの方たちと知己を得ることができました。新聞、テレビの報道に関わる事象への関心、報道へ斜めの姿勢をとるスタンス、発言することの大切さ……などなど自分ながら立ち位置、目線が変わったと思っています。鈴木さんの“仲間”としてFCTの創業時期に関われたことは私の財産になっていると実感しています。時空を超えて生きている鈴木みどりさん、を感じている人は少なくないに違いないと、そんなことを考える日々です。